
放課後と夏の風

桐谷 優牙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

放課後と夏の風

【Nコード】

N0047U

【作者名】

桐谷 優牙

【あらすじ】

俺はラーメン屋の息子。…つつつても、この物語に俺の実家はそこまで深く関係しない。それよりも…つと！見たか？今のアイツの高飛び。150だぞ？150。…あーまたファンコールだ…。彼氏持ちになっても、人気者だなあ、オイ。…ん？なに、もう始める？はいはい、分かりましたよ。そんなじゃ、幕開け

放課後（前書き）

初の作品です。

若輩者ですが、感想、評価を頂けたら幸いです。

放課後

一週間前だ。アイツに告白されたのは。

アイツっていうのは、今の俺の彼女。

高見たかみ 憂希ゆうき。

陸上部のエース、2年ながらも3年のキャプテンと対等に張り合っている。

しかも成績優秀。んでもってクールで美形だから、まあ、モテるモテる。

なのに…なんで俺なんかと…。

分かんねーな！。

あ、俺は、滝本たきもと 蓮華れんげ。

うちの家はラーメン屋『滝麵』。

その息子だからかなんだかしらねーが、

ラーメンのスープを飲むのに使う、あのスプーンみたいなヤツと同じ名前だ。

ただ、これだけは言うておく。

ラーメンを食すときに使う「れんげ」は「げ」を強く発音するが、俺の「蓮華」は「れ」だ。

ドラゴンボールのナック星に出てくる「デデ」とおんなじ発音だ。

分からない人はスルーして良い。ジャンプの鳥明先生すんません。

とにかく、ラーメンを食すときに使うものと一緒にするなということだ。

それだけは譲れない。間違って「げ」を強く言わないように。

んで、今学校。

ちよつと授業が全部終わった、放課後というやつだ。

普通の生徒ならさっさと帰るか、寄り道、もしくは部活動、委員会とか。

俺の場合、まあ後者だな。

アイツの部活を見る事もあるが、自分の部活もだな。

俺は軽音楽部に入ってる。

いま、某アニメで有名になってる部活だ。

ちなみにパートはボーカルとギター。

もしくは、その両方を一気にやっちゃうギターボーカル、通称ギタボなんかもやったりする。

なんで入っているかというところ、中学のときからずっとバンド活動をやってきたからだ。

不良がやるだなんだと、世間一般からはあまりよろしくない部活として広まっているが、

俺から言わせりゃ、そんなのは偏見でしかない。

大体、吹奏楽部は良くて、なんで軽音楽部はダメなんだよ。

クラシックにはかり執着しすぎてる今の音楽家気取りは

新しい風というか、ポップ、ロックのすごさを知らないんだよな。

「蓮！今日は部活か？」

教科書を鞆に詰めていると、ふいに後ろから声をかけられた。

俺の事を、「げ」抜きで、呼び捨てで呼ぶ奴はこいつしかいない。

俺の幼なじみ、谷たに 鬪磨としまだ。

「ん、そうだな…今日は部活して帰るわ。」

「そうか…。なんかお前、彼女できてから部活して帰る日、多くな？」

「…、ツマあ、一緒に帰るくらいはしてやりたいからな。」

「おー、カッコいいねー。よっ、色オト。」

「ツツるせー！」

「ははー！じゃあなー！」

鬪磨は、黒帯の少し出た鞆を引たくって教室から出て行った。

あいつは町道場で空手を習ってる。

両親は、男が生まれたら必ず武道をやらせようと思っていたらしい。

名前もその名残だ。

本当は、柔道女子の谷選手と同じ苗字なので、

柔道をやらせようと思っていたらしいが、本人は柔道場でなく、

空手道場に走って行ってしまった、というのが、空手を始めたキツカケだとか。

というか、あいつが柔道をしていたら、

俺はあいつと今のような関係にはなっていないだろう。

俺と鬪磨は同じ町道場で出会った。

あいつは3歳からやっていたが、俺は5歳のとき、親に連れられて空手を習い始めた。

そのとき、経験の少ない俺が鬪磨から一本取ったのが仲良くなったキツカケだ。

一本取ったときは、鬪磨は悔しくてか、俺と喧嘩になり、

その時に親同士が顔を合わせ、気があうようになり、親の連れで否が応でも

会わなければならなくなり…の流れで、いつのまにか、一緒にいるのが当たり前になっていた。

あいつになら、何にでも気を許せる気がする…。

…っと、また想いにふけっちゃまった。

もうとっくに部署開いてんじゃないか…。

早く行かねーと……………。

部活動

「あ、滝本先輩。遅いですよ?」

部室の戸を開けると、目の前に自分より一回り小さい体が立っていた。

俺ら2年の後輩、赤石あかいし 鈴仔りんこ。

気が強く、活発で、ギター担当だ。

「お前だけか?」

「はい。みんなサボリか、委員会ですね。」

「……。」

俺は黙って髪の毛を掻き上げる。

鈴仔の傍を抜けて、鞆を下ろし、愛用のギターをケースから出す。

それに合わせて、鈴仔も自分のギターを構える。

「先輩、先輩。聴いて下さい!」

そう言つと、鈴仔はジャラーンと弦を鳴らし、課題曲のソロを弾き始める。

「おお……。」

「ど…どうですか!?!」

「大分上手くなったな、まあビブラートがまだ効いてないけど。」

「それはこれから練習するんです!?!」

「…へいへい。まあ頑張ってくれ。」

俺はギターとアンプをシールドを通して繋ぐ。

そして、さつき鈴仔が弾いたソロを見本として弾く。

「………なんで先輩はそんなに上手いんですか!?!」

「一応、今年でギター触ってから4年は経つからな。」

「お…やってるねえ。」

部室の戸が開く。

入ってきたのは3年の先輩、木元 康祐。

プロのミュージシャン志望で、パートはベース。軽音楽部の部長でもある。

「部長、合わせますか?」

「ん…待て待て、今日は珍しくコイツも来てるんだ。」

そういつと、部長は再び部室の戸を開ける。

そこにはドラムの同輩、坂城さかき 瑠璃るりが立っていた。

「……………」

「瑠璃先輩!」

「あいつかわらず無口だな……」

「とりあえず、一旦スティックを握らせてやってくれ。」

「…はいよ。」

坂城はドラムは上手いが、本当に無口で、口をきいたのは2・3回程度だ。

スティックを握ると、軽やかな16ビートを刻む。やっぱ上手いわコイツ。

「はいはい!んじゃ久々に一通りのパートが揃った事ですし、合わせますか!」

30分くらい立った頃、部長が両手を叩いて皆に呼びかける。

「りょーかいい!」

鈴仔が敬礼する。

「分かった。」

俺はピックを握り直す。

坂城は黙って頷く。

「んじゃ…行きますかっ!!」

「おつかれさまでしたー。」

連続で3曲を弾き終えて、各自解散する。

気がついたらもう6時前になっていた。

「俺これから用があるんで。」

ギターケースの取ってに手を掛けると早々に部屋を出ようとする。

「ああ、蓮華。彼女か？」

「え…はい。まあ、そんじゃー!」

ウチの学校の第二グラウンドは、陸上部の独占状態だ。

200mトラックが一周分だから、まあ仕方ないと言えば仕方ない。

ちなみに、第一グラウンドは、球技コート場。

サッカー部と野球部。少し外れた所にはテニスコートが3面。

第三グラウンドは、体育館を使えない球技の連中が使っている、たまり場だ。

そそくさと第二グラウンドへ向かうと、まだ陸上部は部活をしていた。

……いた。

アイツだ、高見。

種目は高飛びと短距離。

まあ、文化部の俺が勝てるわけが無い。

……っと。すげーな。高飛び。

14……5mか、145m。

お疲れさまでしたーという声が響いた所を見ると、

どつちやら練習が終わったんだろつ。

ちよつとグラウンドから離れた場所で待つ事にする。

もうすぐ中間テストか…。

高2になつてもう5月中旬。

そろそろ勉強しなきゃな…と思つた所で声をかけられた。

「おまたせ。」

出会い

「見てた？私の高飛び。」

「うん、みてたよ。145…だっけ？」

「そうそう。照れるなあ。」

「なんか、お前、付き合う前と態度変わってねーか？」

「なっ…か…変わってないわよ！失礼ね！」

「…？そうかあ？気のせいか。」

「うん！気のせい！…！」

帰り道、たあいのない話で良く盛り上がって、

周辺が真っ暗になるまでファミレスで時間つぶして、

コイツを家まで送る…ってのが日課になっちゃった。

それなりに楽しめてるから良いけどさ。

「今日も送ってもらっちゃって…ありがとう。」

「いいよ、もう慣れたし。楽しいしな。」

「あ、今度地区大会あるんだ。見に来てくれる？」

「…ん。日付によるな。」

「じゃあ決まったらまた話すよ。」

「おう、じゃあな。」

「バイバーイ！」

横目で軽く高見を見ながら手を振ってその場を去る。

高見の家と俺の家は駅一つ分違うだけで、どっちも駅前だから交通手段は楽。

ついでに言つと、学校へは、俺の家から近場の駅の方が、遠い。

つまり、定期券内に高見の家の最寄り駅があるから、まあついでに寄れるってワケだ。

帰り道、電車、喋った後、一人でいる時間もなかなか楽しい。

もともと、その場の環境に慣れやすい人間なんだろうな。

と、思っていたら、携帯がブーブー鳴る。高見からだ。

『日付は今週末だよー。来れそう?』

「…っと今週末は…なんもねーな。」

特にないから見に行く…よ、っと。

携帯の送信ボタンを押してから、俺は告白された日の事を思い浮かべた。

同じクラス、お互いあまり目立たない位置で、俺は全く気にしていなかった。

…というか、あんまり恋愛感情に興味が無かった、と言える。

こちらとしては、美人でスタイルも良く、運動も勉強もトップレベルで、

まあ年齢問わず色々な男からモテてるんだろっな、と思っていた。

だから彼氏は居て当然だとも思っていたし、

それに悔やむという感情も自分の中には湧き起こらなかった。

そんな遠い存在が、ふいに目の前に現れた時には驚いたもんだ。

アイツは運動部、俺は文化部。

合うはずも、会うはずもないのに、俺は放課後に学校で告白された。

運動部で、普段もユニフォームでグラウンドを走っているアイツが、あの日だけはまるで文化部の大人しめの子のようにコソコソしていた。

軽音部の部室は、部員が少ないのもあって、別館の端にチラリとあるだけ。

そんな人通りの無いところでウロウロしているクラスーは確定の女子がいたら、

普通誰もが「え？え？どうした？」となるだろう。

それがまさか自分を見つけた瞬間ツカツカとこっちに歩いてきたらおもわず身構えるかしてしまうのは言うまでもない。

俺は身構えた。

そしてとっさに思考に入る。

俺は何かコイツにしたっけ…。なんか…えーっとえーっと…。

「ねえ。」

睨むような顔つきで声をかけられる。

ただ、露骨に「嫌い」というアピールはされていないようだ。

「は…はい？」

「滝本…くんてさ、彼女居るの？」

まず、俺はこの時点でフリーズした。

いるワケねーだろうが。どこにもモテるポイントがあるんだよ。

ギターちよこちよこいじってる機材オタクで、文化部の俺がよ。

そりゃあ、勉強だつてコイツほどじゃないがそこそこだし、

スポーツもコイツほどじゃないがそこそこだし、身長も…あ、身長は勝った。

…ん？コイツもしかして、俺の事からかってる？

そつだ、絶対。こつやって自分を俺より上にみせようって思ってたな。

そう思うとやたらイラついてきた。

「…いねーよ。」

ぶつきらぼつに言い放って、高見の傍を通り過ぎ、部室に入ろうとした。

すると後ろから、思いも寄らない言葉が俺に向かって放たれた。

「そ…それじゃ！私と付き合ってもらえないですか！！？」

二度目のフリーズ。

誰もいない（と思われる）別館に叫び声がこだます。

こつちは理解するのに約10秒かった。

後々話をきくと、1年の時に俺が出た文化祭のライブで

今まで馬鹿にしてた音楽、軽音、バンドのイメージを覆され、

同時に俺のことが気になり始めたんだと。

それから半年間、結果絶えない告白を全て断り、決死の思いで来たんだとか。

そのとき、俺はまだからかわれていると思っていたので、

「好きにすれば良いよ。」

と軽くかわしておいたが、これがアイツはOKだと勘違いしたよう
で、

次の日からもう、迫られるわ迫られるわで困った。

といっても、変な意味じゃないので、誤解しないように。

つまり、一言も教室で言葉を交わさなかった男女が、

突然めちゃくちゃ女子の方が積極的になったということだ。

この時点でもまだ俺はからかわれているのだと思っていたが

次第にその真剣さに、試しに「俺の事好きなの？」と聞いてみると、

「うん」と、即答されてしまった。

ここでボ口を出すだろうと思っていた俺が、逆にひっくり返された
感じだった。

そこから、まあそこまで好きでもないが、断る権利も無いので、

(断ると言う事は、学校中を敵に回すと言う事で、そんな度胸は無いので)

付き合う事にした。今思えば、相当軽いノリで、相手には物凄い失礼だっただろう。

このときから、今の関係は始まったんだっとな。

大会で

「高橋…145m…クリア。次、高見…」

「はい……！」

おいおい…まじかよ…。

145とか……俺だったら120mでギブだっつうに。

走り高跳びエゲつない…。

そう、日曜の炎天下。

言われていた試合を見にきている。

なんというか、地区大会というので気軽に来て見てみれば…

地区大会の「決勝」という……。

度肝抜かれたわ。

まわりに高校生（おそらく決勝まで来れなかった部員）が大量に、ついでにいうと、対抗するように保護者も大勢来ていた。

決勝に上ったのは6人。

全員140mクリアは余裕だったクラスらしい。

……と、となりに座っているおばちゃん軍団が喋っていた。

つつ…！よかった…クリア。

あ、なんか俺まで緊張してきた…。

トイレ行ってこよ。

トイレから帰ると、残り2人になっていた。

あわてて席に戻る。

155mで決勝であるようだった。

両人ともクリアすれば、またレベルが上がる。

俺の緊張もピークだ。

「……では155m、高見。」

「……はい！」

高見が、フウツと一息入れるのが、遠目でも分かる。

走る。

スピードが乗る。

……ッ飛ぶ！！

ー！頑張れ！！

スローモーションで体が動く。

棒を超えるのが見える、が、同時に棒が少し揺れ、心臓が止まる。

しかし棒はなんとか耐えきり、無事に高見はマットに着地する。

「ッ……。高見、155mクリア。」

「っしゃあ！」

おもわず声が出る。

となりのおばちゃんたちは露骨に嫌そうな視線を向けてくる。

それに少々赤面しつつ、次の選手を見つめる。

走り、飛んだ！

こちらも無事にマットに着地する。

が、棒は大きく揺れ、そのまま台から滑り落ちる。

「……………155m、失格。」

「つつつつつつ！……！！！！！！」

声に出そうになるのを必死に押さえて、

それでも湧き起こる感情におもわず席から立ち上がる。

自分のことのように嬉しくなる。

思えば不純な始まり方をしたが、「自分」の「彼女」であることを改めて認識する。

そして、誇らしい気持ちでいっぱいになった。

俺も、高見の事が……好きになっている……、のが分かる。

気がつくと、俺は控え室へダッシュで向かっていた。

「選手控え室」という文字が見えた瞬間、思わず笑みがこぼれた。

軽く光の漏れている扉のノブに手をかけたーその瞬間。

「流石だね、憂希ちゃん。」

男の声が中から聞こえ、とっさにノブから手を離す。

「いえ、そんな…、川上先輩も凄かったですよ？」

「あはは…見てくれてたんだ。」

(誰だ…?あいつ……。)

光の漏れたところに目を当て、中をのぞく。

中には、高見と、もう一人背の高い男が立っていた。

二人ともとても楽しそうに話をしている。

「いや、でも憂希ちゃんが見てくれてたからかなー。」

(……。まさか…こいつ。)

「もう、何言ってるんですかぁ。」

「憂希ちゃん彼氏とか居てたりするの??」

(……。!!…!!やっぱり!!…!!)

俺は口を手で押さえて、その場から少し離れる。

あの川上とかいう3年、高見に気があるんだろう。

それを考えていると、また中から声が聞こえた。

「居てますよ!凄いかっこ良くて、頼れる人です!」

その言葉を聞いて、俺は床に座り込んだ。

「嬉しい。」

そのまま控え室を後にしている自分がいた。

「お疲れさまでしたー！」

我を取り戻して、控え室に再び戻ろうとすると、

川上が多くの後輩を引き連れて控え室から出てきた。

「あれ……。君……。」

川上の方から俺に話しかけてくる。

俺はドキッとした。…まさか見つかったか？

「君が憂希ちゃんの彼氏？」

「え……はい！？はい！」

突然の質問で素直に答えてしまう。

何で分かったんだ!??

「ふーん…。」

川上は俺の体をなめ回すように見る。その視線は若干痛いものでもあった。

「たいした事無いじゃん。憂希ちゃん、俺が貰うかもよ?」

川上は俺に耳打ちをすると、そのままスポーツタオルをひるがえして去っていった。

俺は呆然とその場に立ち尽くすしか無かった。

修羅場

『俺が貰うかもよ?』

俺はふらふらと危なげに歩いていた。

あの顔立ちは間違いなくイケメンに入る部類だろう。

背も高い、キリっとした顔立ち、そして見る限りの筋肉。

それをとっても俺が勝てる要素はない。

本当に奪われるかもしれない…。

それがぐるぐる頭を回って、俺は結局、高見に会わずに会場を出た。

今会っても、引きつった表情を見せて逆に心配されるだけだ。

ちょうどそのとき、携帯が鳴った。

死んだ魚の目でうつろに画面を覗く。高見からだった。

『ちょっと、なんで先に帰っちゃうの?』

俺は表情を変えず、淡々と文字を打って「返信」ボタンを押した。

『悪い、頭痛くなったから早めに休むわ。優勝おめでとう。』

メールはそれっきり帰ってこなかった。

俺は家に帰ると、まっさきにギターを持って制服に着替え、学校へ向かった。

現在午後3時を回った所。いったい何を思ったのだろう。

うつろな目のまま、部室に入り、ギターを置いて、その場に座り込んだ。

一息ついて、考えようとした。

あの場で考えられなかった事を、もう一度深く。

瞑った目をゆっくり開け……ると、鈴仔が覗き込むようにして目の前にいた。

「!!!!!!」

驚きで思わず後ずさりする。

「先輩イ……。あの…さつきからずっと呼んでるんですけど…生きてます??？」

「あ……ああ。何だ??？」

「今日練習ないのに何で来たんですか?」

「ちょっと考える事があってな……、それより、お前こそなんで?」

「自主練ですよ。」

鈴仔は、ジャラーンとギターを鳴らす。

「そ…そうか…。」

しばらく沈黙が二人を包む。

「あの…先輩。」

先に口火を切ったのは、鈴仔の方だった。

「ん?何だ?」

ようやく少しは生氣を取り戻したが、まだ何も考えられそうにない。

「悩んでる事があるなら、言って下さいね、力になりますから。」

「あーうん…いや、良いよ、気にしないで。」

俺は頭を抱えて髪の毛をかく。

「そういうワケには……。」「

「いいから、ちょっと放つといて欲しいんだ。一人で考えたい。」「

「でも……。」「

「頼むから!!」「

「先輩!!」「

「……?」「

怒鳴りを返されて、俺は何が起こったのかわからなくなった。

そして、恐る恐る彼女を見た。

「な…なんだよ。」「

「私……先輩の事が好きなんですよ?」「

俺は無意識に立ち上がっていた

「先輩…私が…何で軽音部に入ったか…分かります…?」「

鈴仔は涙目で恨めしそうに俺を睨んでいる。

「先輩に…一目惚れしたからなんですよ!?!?」「

息が詰まる。呼吸が止まる。

「部活紹介でのライブ…あれを見てカッコいいと思ったのは…軽音でも…ギターでもなくて、先輩なんです！」

胸が締めつけられる。

ふいに俺は人の気配を感じて扉の方へ振り返った。

ユニフォームを来た高見が、両手で口を覆って立っていた。

初喧嘩

高見はそのまま何も言わずに俯いて部屋を出ていった。

「ちょ…待ってくれ！高見！…！」

俺はあわてて部屋を出て、高見を追いかける。

「待って…！」

「触らないで…！」

追いついて、高見の肩に触れようとして、拒絶される。

「……『頭が痛い』んだよね……。だから私とも帰らずにあの子と…。」

「

「違つって！誤解だ！」

「誤解?!じゃあ、なんで誤解されるような事するのよ!…」

高見が泣きながら振り返って俺を見つめてくる。

「……っ!…」

「何なの…、やっぱり…私のこと好きじゃなかったんだ。遊んでたんだ…。」

その言葉は、高見の本心から出ている言葉とは到底思えなかったが、

それでも俺はムツときた。

そしてそんな俺が言い放ったのは…。

「お前だつてあの川上とかいう先輩にデレデレしてたじゃねーか。」

高見はとっさに顔を上げる。

「何故それを…」という顔をしているのに、余計に腹が立った。

「知らねーとでも思ってたのかよ。」

俺がなんで嘘をついたつて？俺がなんで先に帰つたつて？

自分はどうなんだよ！！」

「ち…違つわよ！あの先輩は…。」

「何が違つんだよ！？全部見てんだからな、控え室での事。」

「なっ…じゃああのキスも…？」

「…！？キスう！！？」

予想外の発言に俺の口調はさらにキツくなる。

「…あ…いやあ…違つの！ごめんなさい！…あ…」

俺の目の奥が熱くなる。とっさに走る。

逃げたかった。

死のうかと思った。

校舎を出て校門へ向かう。

「もう何も考えたくない。その一心だけで俺の行動は成り立っていた。」

校門にもたれかかるとして、誰か立っているのが見えたが、

それどころでは無かった俺はもう、その人の顔も見ずにそのまま横を過ぎようとした。

「……………何やってんのさ。」

聞いた事のある声が、俺の耳に届いた。

だが、聞き慣れてはいない。どこか懐かしい…。

無意識に俺は声の方向を向いた。

あいつが立っていた。

俺と口を聞いたのは2・3回。

無口なドラマー、
坂城^{さかき} 瑠璃^{るり}が。

初会話

「さ…坂城…。」

漏れた言葉だった。

坂城は本を読んでいる。視線はずっと本に向けられたままだ。

坂城は無口だが、うちの高校で不落のトップを守っている秀才でもある。

美人な顔立ちなので、密かに人気もあるらしい。

しかし、めったにというか、本当に喋らないので、

(一部のマニア以外)には話しかけづらい存在として位置しているのも事実だ。

「…あんたが何してんのか、大体分かる。……話…聞こうか。」

そう言いながらも、坂城はずっと本を見つめている。さらにはページをめくる。

「坂城…悪いけど今は…」

「間違えた。……『聞こうか』じゃない、『聞かせる』だ。」

少し強めの口調に思わず反応してしまふ。

こんなに喋ったのは初めてだ。

恐らく、この状況を一般の男子生徒が見たら、俺が怨まれて当然だろう。

……内容を除いてはだが。

「どづいつことだよ…?」

「あたし…あなたの彼女と…長い付き合いなんだよね。」

坂城はさらにページをめくる。

「…！高見と…!?!?」

「…そう。小学校の高学年くらいからかな…ずっと。」

坂城は短い髪の毛を耳に掻き揚げる。視線は相変わらず本。

『話し声』というのを初めて聞いたが、大人びていて、スマートな声だ。

「あたし『つるみ』に興味なかったから、ずっと一人でボーツとしてたの…。」

でもね、あの子は…憂希は…あたしを使って遊ぶのが好きでね…。

ポーツとしてるところに耳元で風船割ってきたり…とか。」

これを本を眺めながら表情を変えずに淡々と話す坂城はなかなか面白かった。

緊張の糸や、さっきまでいっぱいだった気持ちが少しずつ晴れていくようだった。

「小学校は『うっとうしい』としか思ってたけど、

中学になってもしつこく絡んでくるんだよ…あの子…。

で、何でかって聞いてみたら、『友達になりたい』とか言っちゃってさ。

…初めて人前で笑ったかもね。」

目を閉じて、本を閉じる。

そして初めて俺の目を見て、にやりと笑った。

俺はこいつが人前で笑顔を見せるのを初めて見た。

「あたしがこの高校選んだのも、あの子が行くって言ってたから。」

空を見上げる坂城。視線の先には、何があったんだろうか。

俺は、普段話さない奴と話していて、何となく、高揚感に浸っていた。

だが、次の一言で俺は我に返った。

「……………まあそんなことは今は重要じゃなくて……………」

睨みつけられる感覚。両手拳がきつくなっているのが分かる。

強くでは無いにせよ、少々の敵意識を持たれている事は感じた。

「とりあえず……………話……………聞かせる……………。知る権利が私にはある。」

「……………。ふん……………。なるほど……………」

俺は一通りの流れを坂城に説明した。

坂城は腕を組んでいる。

「……………で？断るんでしょう？その……………後輩の子……………」

「当たり前だ！俺はそれで誤解されたのが……………」

「誤解されて……………、頭にきて当てつけみたいなことを言っちゃったと……………」

俺はうつむきながら首を縦に振る。

「……。なんだ…痴話げんかじゃん。」

「…!？」

「大丈夫、心配しなくても。アンタがちゃんと謝れば、許すよあの子は。」

「……どうだろう…。」

「ちゃんと謝るのよ…そうすればきっと。」

「…うん。」

「ただ、あの子はあの子で考える時間があるから。…それにもうすぐ中間でしょ?」

「あ…そっか。…でも…でもどうするんだ?」

「中間終わりにでもサプライズがたら謝れば、また仲直りできるわよ。」

「そうかな…。悪かったな坂城。ありがと!」

俺は坂城に礼を言うと、ダッシュでその場を後にした。

「……。あたしってば…何やってんだか。」

ケリ1

「サプライズ…ね…。」

俺はあごの下に親指をおいて頭を回転させた。

たしかにもうすぐ中間だ。

中間の間は勉強に集中した方がいいかもしれない。

携帯でカレンダーをみると、試験まで一週間どころか残り4日をきっていた。

俺は基本的には勉強はそこまでしない。

別にしようがしまいが、音楽に頭脳は関係ないと思っているからだ。

俺は将来、音楽関係に進むつもりだからな。

ただあいつは…高見は違う。

成績優秀、陸上もトップレベル、まさに才色兼備、文武両道だ。

もう大学なんかも決めているのだろう。

カレンダーをみると、中間が終わったその日に、『出空き』と

書いてあった。

『出空き』というのは、まあ、俺がかつてに略して書いてるだけなんだが、

『出演者空きあり』の意味で、

ようするに、『できれば出演してくださいライブ』に誘われている、ということだ。

「…これだ…!!」

このライブに、高見を誘って、ライブで謝ろう。曲を通して。

高見はライブをしている俺を好きになってくれたんだし、問題ないはずだ！

早速、ライブハウスに電話して、うちの軽音部の出場枠をとってもらった。

「おはよう。」

次の日、俺は部室に真っ先に向かった。

中には予想通り、鈴仔が椅子に座っていた。

鈴仔は俺をみるなり、きまらずそうな顔をして目をそらした。

「赤石、悪いけど、俺…昨日の子と…。」

「わかってます。良いんです。私、知りませんでした。

先輩が、あの、陸上部のエースの先輩とつき合ってるなんて…。」

「…赤石…。」

「すみませんでした！お二人のことは、潔くあきらめます！」

鈴仔は、突然立ち上がって頭を下げた。

「…酷なことを…言っても良いか？」

俺は昨日決めたことを赤石に話す決意をした。

「……はい…。」

赤石は沈んだ表情で俺を見つめる。

「中間最終日に…ライブが決まった……。そこに、昨日の子もくるんだ…。」

本当にすまないと思ってきているなら……その…この部活で…。」

「分かりました！！協力します！！」

赤石の言葉があまりにも即答すぎて、俺はすこし呆気にとられた。

「ほ…本当か…??」

「はい、任せてください!」

「そ…そうか…すまなかつたな…。じゃ…俺はこれで…」

「はい!すみませんでした!」

鈴仔はもう一度深くと頭を下げた。

俺は完全に安心しきって部屋を出た。

知らなかったんだ。

「…ふう。あ…相手が…あの先輩なら…勝ち目ないですもんね…。
あ……な…涙…。あれ…止まん…。」

一人残ってひたすらない続ける後輩の姿を。

ケリ2

部室を出ると、俺は廊下を力の限り走った。

「高見に会いにいくんだ。

一刻も早く誘いたかった。どうしても謝りたかった。

しかし、今日はいつもいるハズの場所にいない。

仕方なく彼女の教室に向かい、

「あの…高見ってどこか知らない？」

俺はすぐそばを通り過ぎようとしていた女子生徒二名を捕まえて聞く。

「え？憂希？…あの子今日休みよね？」

「うん、なんか体調不良らしいね。」

「そっか…ありがとう。」

俺は廊下を再び走る。

俺はポケットから携帯を取り出してコールする。

「…ッもしもし？高…。」

『ただいま、電話に出ることができません…ピーッという発信…』

俺は走るのをやめて立ち尽くした。

何か連絡手段をひたすらに考えた。

そして、目の前から声がした。部長だ。

「お！どうした？蓮華。そんな絶望的な顔して。」

「先輩…。」

「なんだなんだ！話试着してみるよ！この木元部長に！」

部長は右手を胸のあたりにバシッと拳を打ちつける。

「ふん…。なるほどな。」

「部長は…どう思いますか？」

「いいと思うよ、俺らは音楽で気持ちを伝えてナンボだからな。」

「ですよね…。」

「だが……どうせ来てほしいなら、もっと凝ったサプライズにすべきだろ。」

「…?」

「ライブまであと一週間。こっちから音沙汰をなくしてやる。」

「…!??」

「まあ、あれだ。」

連絡はライブチケットと軽くメモ書き程度に書いて、ポストにも入れとくんだよ。

それつきり!つまり、向こうに仲直りしたい気持ちがあるなら、ライブに来るしかない。」

「……。」

「それで、ライブでドバーツ!!…分かるか?」

「まあ…大まかな内容は…大体掴めました。でも…。」

「なんだよ?」

「…それって、向こうに仲直りする気がなかったらどつするんです?」

「そんなときはお前…アレだよ。男だろ!??」

「……………」

俺はとりあえず、部長に言われた通りに、腹をくくることにした。

本番前

教室。

聞こえるのはシャープンの音と吐息くらいだ。

中間も今日で最後。

…そして、今日はライブの日。

俺は今日、木元部長や坂城、赤石に協力してもらって、高見に気持ち伝える。

…つもりだったんだが……。

最高のオリジナルにしようと思って……、熱入りすぎた……。

2番までしかできてねえ。

残り、Cメロと……大サビ。

大サビはともかく、Cメロが全くしっくりこない。

…これは出演までに脳しぼるか……。

キーンコーンカーン！

チャイムが鳴る。

俺はメロディを考えていたのでテストはほぼ白紙。

名前すら書いてないのを見て、軽く焦りを感じ、いそいで名前を書く。

「よっし！終わった。ライブハウス直行だ！！」

「部長遅れてすいません！」

ライブハウスには、俺以外全員着いていた。

「先ー輩！遅いですよぉ！」

「あ…ああ、悪かったな、赤石。」

「良いですよ！頑張りましょ」

赤石は、まるであのことが無かったように振る舞ってくれている。

坂城も俺と目が合つと、少しだけ笑顔になってくれた。

俺はそこに少し安心した。

「で？蓮華。できたのか？Cメロは？」

「あ…まだです！今すぐ考えますんで…!!」

「あー！先輩！その前に一回!!」

「……一回？」

「一回だけ、2番まで通しましょ？最悪のことを考えて……。」

「あ…ああ、そうだな……。」

全員機材を準備すると、顔つきを変える。

坂城がスティックを持ってフォーカウントを取る。

「…ワン、ツー、ワンツースリーフォー！」

熱くなる 思考 仲の良い 日々

重なる 試行 でももう 戻らない

こじれた関係 修復を 試みたけど

君に 謝りたい 「ごめん」と その一言だけ

それだけが 僕の想い

周りの 関係 再び 巻き込み

崩れるのが 恐ろしくて 逃げた

でも皆 手を延ばして 助けてくれたよね

皆に 言いたい 「ありがとう」 足りない位

それだけが 僕の想い

これだけを 君の元に

「……………！！ふうっ！」

「いい感じだ！！これならいけそうだな！！」

部長がタオルで汗を拭う。

「はい！今すぐメモ考えるんで……………あ！坂城！あのさ！」

「…大丈夫。今朝ポスト見たけど…無かった。」

坂城もタオルで顔を覆っている。

「……。ありがとう！」

出演まであと2時間。

本番前（後書き）

どうも、改めまして、桐谷 優牙です。

ここまで読んでくださってありがとうございます。

この小説はかなり後半に突入していて、正直、あと2、3話で終わります。

元々私の最初の作品として、駄作なりにも最後まで続けようと書き続けました。

結末は…残念ですがあまり良いものではありません。

これは、最初からの設定ですので、今更変えようもありません。

バットエンドが気に入らない方は、この先に進むのを辞める事をお勧めします。

哀しみ

ライブが始まった。

俺らのバンドの枠は最後。

常連なので、かなり良い「トリ」というポジションを頂いた。

「坂城！高見は…？」

俺の質問に坂城は無言で首を振る。

トリとは言っても、小さなライブハウス、小さなライブだ。

俺らが出場するまでであと1時間と半ちょいくらいしかない。

だから早く来てほしかった。

そんな中、坂城の携帯が鳴る。

俺は思わず前かがみになる。

坂城はすぐに携帯を耳に当てる。

「…はい。」

「……………! ……! ?」

「ど…どうしたんだよ、坂城。相手は…高見なのか？」

「……………。」

「おい…坂城？」

「……………はい、分かりました。すぐ向かいます…。」

そういうと、坂城は携帯を耳から落とした。

「おい! ?」

「……………きが……………。」

「…?」

「…憂希が……………トラックにはねられた。」

ライブハウス付近の病院へ坂城と共に駆け込む。

「高見は!？」

「……高見 憂希さんの……ご友人の方ですか？」

俺たちがキョロキョロしていると、医者が話しかけてきた。

「はい……!高見は……大丈夫なんですか？」

「……腹部から大量に出血……と、着地のときに頭を強く打たれた
ようです……。」

出血の処理は全力を尽くしたんですが……。」

「全身をナイフで貫かれたような痛みが走った。」

「……高見が……死んだ!？」

「うそ……憂希。」

「そんな……どうして!？」

俺は思わず医者に突っかかる。

「…れ…連絡してくれた方によると…ものすごい急いで走っていたらしく…。」

そこへ、暴走していたトラックが突っ込んできて…。

…はねられて、地面に叩き付けられて、その人が駆け寄ったとき…。

『ライブ会場に行かなきゃ…』と、うわごとを言っていたようです…。」

体中の力が抜ける。

「そ…そのトラックの運転手は!?!」

「…そのまま暴走してコンクリート壁に突っ込み、運転手は即死でした…。」

わき起こっていた怒りは、哀しみを倍増させるだけのエネルギーになっっていた。

俺は唇を噛み締めて、拳をグッと握る。

「高見は…ライブハウスに向かってる途中で…事故にあったのか…。」

…俺らの…ライブを見に来るために…急いで…。」

体が勝手に、フラフラと壁に寄りかかる。

「…め…面会はこちらです…。」

扉をあけると、布が被せられているベッドがあった。

「そんな…、憂希？」

坂城はあふれる涙を押さえながらそっと布をとった。

間違いなく、高見 憂希、その人だった。

「嘘だろ…、なあ！高見！！今日だぞ！！？」

気がついたら、俺の目から滝のように涙が溢れてきた。

「滝本…これ…。」

震える声で、坂城が俺に手渡してきたのは…手紙だった。

「…どうしてかな。この子、ずっと手に握ってたみたいよ。」

ボロボロなその紙切れを俺は涙を拭いて見た。

――

滝本くんへ

川上先輩のこと、ごめんなさい。

あれは全部一方的に川上先輩がやってきたの。

私、キスされたときは本気で怒って、先輩の頬叩いたのよ？

私が好きなのはあなただけだから。

声にだして、あなたに言いたいことばっかりだけど、

このライブが終わったら、私、すぐに部活の合宿に行かなきゃならないの。

ごめんなさい。

この手紙書いてて思うのは、あなたの演奏をもう一回早く聞きたいということ。

それだけだわ。

とてもライブが楽しみ。

部活の合間に走っていくつもりだから。

…なんか時間軸がおかしいわよね。

これをあなたが見ているのは、ライブが終わった後のハズなのに。

でも、こうやって書いておきたいの。

合宿が終わったら、もう一回、前みたいに過ごしたい。

今度は、できるなら「滝本くん」じゃなくて、「蓮華」って呼びたい。

本当にごめんなさい。

そして、ライブ、ありがとう。

高見 憂希

—————

最後まで読まないうちに一度拭いたハズの涙が再びあふれてきた。

「高見…いや…憂希。ごめん…ごめん……！」

ぶつけようの無い、自分の愚かさ。

悲しみ。

心から好きだったと、居なくなっただけからいつそう深く感じる。

「…つ坂城…！行かなきゃ…。」

「……………え？」

「俺たちは…しなきゃいけないことが…あるんだ…！」

時計は、俺らの演奏が始まる、10分前を指していた。

鎮魂歌

「どういうことだ…。」

せつかく高校生とは思えないレベルのバンドが見れると聞いてやってきたのに…。」

ライブハウスに一人の男がいた。

彼は某プロダクションのプロデューサー、田中^{たなか} 倫太郎^{りんたろう}。

今、世間で少しずつ注目を浴びているプロデューサーである。

「遅れて…すみません!!」

客の歓声と同時にG v . とD r . が入場してくる。

開始から5分過ぎていた。

「…まず、減点…と。」

田中は手帳に赤でxを一つ書き込む。

「今回やらせていただく曲は、すみません、1曲だけです。」

G v . のM Cに、客からブーイングが飛ぶ。

「…なんだ、その程度なのか？」

さらに赤の×が書き込まれる。

「早速…始めたいと思います。」

「あい哀するあなた貴女へ、レクイエム鎮魂歌」

熱くなる 思考 仲の良い 日々

重ねる 思考 でももう 戻らない

こじれた関係 修復を 試みたけど

君に 謝りたい 「ごめん」と その一言だけ

それだけが 僕の想い

客が「おおー!!」と喚声を漏らす。

「…ふむ悪くない。」

田中は首をかしげる。

ソロの部分はG v ・とG t ・がすばらしいハモリを奏でていて、観客のボルテージはマックスになった。

だが、激しいソロが終わると、ボーカルだけの静かなCメロへ。

そのギャップに、観客たちも、思わず静かになる。

その娘は 今 どうしてると 思う？

ホントは ここに くるはずだった なのに

その娘は もう この世に いないのだから

僕らは なにも できなかった なのに

君は こう言った 「歌って」って だから

僕らは 君の 想いに 応える 伝えてやるんだって

君の 生きた証 歌って 僕が 伝えるよ だから

キミノタメ 僕は歌う

一生でも 僕は歌う

気がつくと、俺は泣いていた。

Cメロあたりからだろうか、勝手にこぼれてきた。

それが伝わったのだろうか、客の多くも涙をこぼしていた。

田中は黙って手帳の×に棒線を引き、「期待度120%」と付け加えた。

あれから2ヶ月、今は夏休みで学校は無い。

俺らはあのライブに来ていた田中さんってプロデューサーに言われて、

プロとしてデビューすることになった。

前の俺ならすぐに断っているところだろう。

でも俺は多くの人に伝えなくちゃならない。

彼女がこの世を生きていた事を。

「…こんな形で…プロのミュージシャンになる…なんてな…。」

木元部長が気まずそうな、でも悲しそうな顔でうつむく。

「…先輩…グスッ」

赤石は目につつすらと涙を浮かべている。

「皆。前にも言ったろ。俺らは伝えなくちゃならない。

…いや、俺は伝えなくちゃならない。憂希が生きていた事を。

だから……協力してくれ……！」

「……誰があんただけなのよ。」

後ろから坂城が声をかけてくる。

「あたしだって……憂希の親友。……憂希が生きてた事を伝える義務があるわ。」

「もちろん……俺らはいくらでも協力するさ。いくらでも。」

お前は一人じゃない。バンドは……一人でやるもんなんかじゃないんだ。

そうだろ？」

木元部長が悲しげな表情の中に、わずかに笑みを見せた。

それからだ。

夏休み期間中、俺らはほぼ毎日活動した。

雑誌にも登場した。

『登場……！高校生ユニット……！』

なんて見出しで、少しずつ、有名になっていった。

バンド名は…あいつの走っていた『夏の風』。

たとえ俺が死んでも、俺が忘れられても、

彼女がこの世を生きていた事を。

俺は歌い続ける。

この喉が壊れるまで。

この身が果てるまで。

俺は伝え続ける。

後悔なんてしない。

もう腐るほどしたのだから。

俺は歌い続ける。

放課後も、『夏の風』と共に。

鎮魂歌（後書き）

…はい、第一作目、無事に完結です。

活動報告も更新しますので、詳しくはそちらをご覧ください。

「放課後と夏の風」を読んいただき、本当にありがとうございました。
しました。

2011年8月26日

桐谷 優牙

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0047u/>

放課後と夏の風

2011年10月9日07時29分発行